

17) 非B非C型肝炎の検討

五十嵐健太郎・米山 靖
畑 耕治郎・塚田 芳久 (新潟市民病院)
何 汝朝・月岡 恵 (消化器科)

当院において、過去5年間に、非A非B非C型肝炎例は、急性肝炎(AH)3例、劇症肝炎(FH)2例、慢性肝炎(CH)4例であった。血中HGVは測定し得た5例とも陰性であった。

AHでは、年齢は22歳から35歳で、輸血歴はなかった。GPTは初診時1,000から2,000で、初黄例はなく、3週から3ヶ月の経過で自然治癒した。

FHは23歳、42歳で1例に輸血歴があった。GOTは13,250と1,404で1例は20日で回復、1例は3ヶ月の経過で死亡した。

CHは、33~56歳であり、輸血歴はなかった。2例が抗核抗体陽性であるが γ -Globulinは正常範囲で、AIHと断定できず、組織所見はいずれもCAHであった。

HCV抗体の測定により、原因不明の肝炎は比較的稀であると考えられた。

18) 当院における慢性C型肝炎に対するインターフェロン治療の現状
— $\beta\alpha$ 併用療法の経験を含めて—

今津 和彦・富樫 満
山田 聡志・黒瀬 龍彦
熊野 英典 (新潟労災病院内科)

C型肝炎患者88例を対象にIFN治療を施行し、以下の3点につき検討した。①IFN- α あるいはIFN- β 単独投与72例の治療成績 ②IFN- β 、IFN- α 併用療法16例の成績 ③IFN治療後の発癌例。①ではCR率は72例中19例(26.4%)であった。②では β 6MIU 1回/日投与群と3MIU 2回/日投与群に分け、 β 2 or 4週連続投与 α 10MIU 3回/週22 or 20週の間歇投与を行なった。全体では、CR率は16例中5例(31.3%)であった。 β 2回/日投与群でのCR率は6例中3例の50%と良好な結果を示した。うち2例は1bタイプでかつ1 mEq/ml以上の症例であった。③IFN治療後に発見された肝細胞癌は5例で、そのうち3例がCR例であった。肝癌発見までの期間はIFN投与終了後22カ月から39カ月であった。治療前の画像評価はもとよりCR例では治療後のフォローアップがおろそかになる傾向があるため、治療後も最低3年間は画像を含めてフォローアップしていく必要があると思われた。

19) HCV 各種遺伝子領域における抗体発現の検討

黒田 兼・遠藤 稔
杉谷 想一・石川 直樹
太田 宏信・吉田 俊明 (済生会新潟第二
上村 朝輝 (病院消化器内科))

【目的】最近HCV遺伝子のコードする蛋白に対する抗体の発現を領域別に簡便に測定するラインイムノアッセイが確立された。そこで臨床事項と併せて検討した。

【対象】第二世代抗HCV抗体陽性患者49例よりえられた血清78検体。【方法】ラインイムノアッセイはコア、NS3、NS4の合成ペプチド抗原、さらにE2/NS1、NS5領域に対する抗原をそれぞれコーティングしたナイロンプレートを使用し分画ごとに異なったバンドとして発現を確認した。【結果】コア抗体・NS3・NS4のいずれかの出現する率は100%でアッセイの妥当性が示された。しかし、抗体の発現の有無による2群間検定で有意差はなく、今後症例数を増やし、個々の症例での経時的な変化および病態との関連を検討する必要がある。

20) アメーバ性肝膿瘍の2例

齋藤 敦・藤村 夏美 (済生会川口総合
関根 忠一 (病院消化器内科))

症例1は28才男性。10日前よりの発熱と上腹部痛にて入院。1年前にUCの既往歴あり。現症では右上腹部圧痛を認め、検査所見では炎症所見と軽度肝機能障害を認めた。腹部US・CT上、肝右葉前下区域に7cmの被膜化腫瘍病変を認めた。血清赤痢アメーバ抗体陽性にて確診。US下肝膿瘍ドレナージ(PTAD)とメトロニダゾール内服にて治療。症例2は34才男性。1ヶ月前より粘血便が出現し近医にてUCと診断・治療されたが、発熱と右上腹部痛が出現したため、当院入院。現症では右上腹部圧痛を認め、検査所見では著明な炎症所見と軽度肝機能障害を認めた。腹部US・CT上肝左葉内側区域に4×6cmの腫瘍病変を認めた。粘液便より栄養型赤痢アメーバが検出され、PTAD後伝染病隔離病院へ転院。2症例とも男性同性愛(ホモ)であった。